



若狭ゾーン
story

龍の約束

ここを目的に訪れる観光客が少ないゾーンながら、龍柱をはじめ異文化とのつながりを感じさせる興味深いエリア。琉球王国（現在の沖縄）の中心であった那覇に繰り広げられていた歴史背景を絡めながら、龍柱の秘密が明かされる。

登場人物

成龍 / 清国人のエリート測量技術者 21歳
舞加那 / 久米村の女中
久米村の主人 / 中国の文人趣味にあこがれを持っている豪商
蔡温 / 福州に留学経験があり、成龍とは旧知の仲
次良 / 久米村の青年、御用聞き
徐葆光 / 成龍の上司の冊封使、成龍の仕事に信頼を置く
護国寺の住職 / 医術の心得がある

プロローグ

嘉慶6年2月16日
ガタツ…ゴゴゴ…

船がきしむ様な音が響いたかと思うと、ゆっくりと、船が動き出した。

昨年、福建の港から渡航して、すでに8か月が過ぎている。

測量技術師である私は、冊封国である琉球への使者として命を受け、尚敬王の儀礼のための船に乗った。清国の貧しい田舎に育った私は、出世のため技術者になろうと福州に出て、働きながら測量と土木を学んだ。

この時、福州にあった琉球館という琉球国の出先機関で働く、蔡温という若者と出会った。華人のように話し、詩歌を詠む教養豊かな琉球人だった。

彼に琉球語を覚えてもらい、ついに琉球行きに船に乗ることができたのだ。

仕事は、琉球での測量と、琉球人にその技術を伝えること。

蔡温によると、土木工事の基礎となる測量技術は、琉球ではかなり必要とされているらしい。

この船は、琉球で御冠船といわれ、琉球国との外交儀礼、冊封を行う船だ。

乗船した我々649人は、琉球にとって皇帝の使者となり、全員来賓として扱われる。

最初は、旧友との再会以外、退屈な任務が待っているだけ、そんな思いで琉球へ渡った



久米村600年記念碑 (松山公園内)

のだった。それが、たった8か月の間に、この小さな島国をこんなにも愛おしく感じるよつになるとは…。

ハリー（爬龍船競争）や綱挽など、多くの琉球文化に触れた。それは普通の人々が心から歓喜し、熱狂し、そして神に祈るようなイキキとしたものだ。そこにはいつも舞加那が居た。小さな身体で凍った私の心を溶かしてくれた琉球の女性だった。

もう一度逢いたい。私は読んでいた書物を読み、甲板に出て、舞加那との出会いを振り返っていた。

舞加那と成龍の出会い

初めて降り立つ琉球の地。那覇に到着すると先ずは、蔡温と会った。彼は港近くにある久米村の出身だ。

蔡温の案内で、久米村を歩く。久米村は、久米三十六世という、明の時代に渡ってきた人々によってできた華人街で、我々華人にとつてどこか懐かしい感じがする村だ。歩いていくと中華風の建物があった。建物はもちろん、特に漏窓や洞門などの庭園技法が見事。福州にある文人庭園を彷彿とさせるため、華人仲間の間で福州園と呼んでいるところだ。

ガーンガーン、ガーン！

「こつちだ、こつちだ、龍が暴れるぞ〜」

久米村の静かな自然に触れていると、騒々しい集団が追い越していった。

「何事だ…」

「成龍殿、最近この辺で大きな白龍が現れるという噂があります。最近、ある家に雷が落ちて死者が出た。しかも葬式の時に禁忌を犯してしまい、龍が怒っているとも噂の噂なのです」

「それで龍が暴れると？」

「そうです。近々、爬龍船競争もあるので、海難事故につながるかと恐れています」

「琉球でのハリーといつやつでしようか？あれはむしろ龍を呼ぶ意味があると思えますが」



仲島の大石

「この国は迷信を信じやすいのです」

騒がしい琉球人にいささか呆れていると、道端にしゃがみこんで泣いている20歳に満たない若さの女がいた。それほど裕福には見えないが、かんざしの飾りが洒落ていて、私が見た琉球の一般女性とは少し違う佇まいがある。

「舞加那か？どうしたんだ、どうしてここで泣いている。」

蔡温は顔見知りのようだ。

「蔡温様、白龍がかわいそうで…」

顔を上げた舞加那という娘の顔を見て、私はそれこそ雷に打たれたような衝撃をうけた。

「久米大通りに出る白龍を退治しようと、天妃宮で祈禱をしているの。あれでは龍がかわいそうだよ」

「それは、龍の呪いではありません〜」私は思わず叫んでいた。



あまがし(沖縄ぜんざい)



けてあり、中にはあられのようなものが沈んでいる。これは那覇の名物だぞうだ。主人は、私が測量や土木の知識があるということを知り、あれこれと庭の事を相談してきた。我が国の文人庭園に近づけたらしい。私の助言に主人は上機嫌だった。

那覇ハーリー

それからしばらくして、わたしの宿を舞加那が訪ねてきた。
「たまには、海を見るのもいいですよ」
少し公務が残っていたが、しばし筆を休めて那覇ハーリーを見物にいった。
泊、久米、那覇という3組が、大きな龍の船に乗り競争をする。各地区から選ばれた男たちの真剣勝負だ。
ジャーン、ジャーン、ジャーン
銅鑼の音が鳴り響き、競争が始まった。観客の熱狂する声に、舞加那の声が重なる。
「久米頑張れ〜！泊、那覇になんて負けるな〜！ホラ、成龍さんも応援して。黄色い船が久米よ。あなたの国を表しているの。黒の泊は琉球、青の那覇はヤマト(琉球王国時代における『日本の呼び方』を表しているの(※1))」
「そ、そうか。加油！(ジャーヨー)、加油！加油！」
「うん。久米、加油！、久米、加油！」
いつのまにか2人とも中国語で応援していた。結局、今年の勝負を制したのは泊だったが、

競技が終わった男たちは互いの健闘をたたえあっていた。これもこの国の気質なのだろう。
「あく残念。負けちゃったね、成龍さんの国」
「え？久米ではなくて？」
「ハハハ。大きな国の人のくせに、小さいことは気にしない！」
舞加那が笑う。つられて私も笑った。心の底から笑ったのは久しぶりだ。考えてみると、琉球の人々はよく笑う。それは未来に進むために笑っているのだ。この国にいると、公人としての立場や、人を押しのけて出世しようとする自分を笑い飛ばすことができたと。

オオゴマダラ

私は公務に追われ、舞加那の笑顔思い出しながら退屈な時間を過ごしていた。用がないので、舞加那に会うこともない。私は、皇帝の使者の一員という自分の立場を恨めしく感じた。
「ダブリーサーピラ、成龍様、メンシービーガヤ(ごめんください)。成龍様いらっしやいますか、私は次良という者で久米村から使いました」
次良は舞加那と同じく、あの久米村の主人の使用人だった。
彼が言っには、主人が庭を見てもういたいという。私の助言を受け、庭が完成したというのだ。お礼に食事をとることだが、どうや

かしまった言葉は、まるで全てを知った私を見透かしているようだった。
「ま、待つてください」
舞加那のうしろ姿に、声を絞り出した。
「と、とてもよかったです。これを持っていきなさい」
奥に下がろうとした舞加那を引き留めるように、琥珀を差し出した。
「これを。虫が入ってます。ムカデか何かかもしれませんが、私の国では龍が閉じ込められているといって人気のもんです」
主人が目を見ているのが分かった。龍の琥珀は、福州でもそう見られるものではない。彼の趣味からしても、のどから手が出そうな代物だろう。

「成龍様、お礼をさせていただきます。そうだから、おまがしを作ったのよ。食べていらっしやらない？蔡温様のお友達のお冊封使様が来るとなれば、旦那様も大歓迎よ。ブクブクー茶もあるからほら、早く」
背中を押され、私たちは舞加那の『主人』宅へ向かった。そこは、この辺では割合に裕福な家ようだった。恰幅の良い老主人は、すぐに我々を中に招き入れ、歓迎してくれた。
あずま屋に通されると、舞加那が無邪気に笑いながら、あまがしを運んできてくれた。押し麦と、豆で作られたあまがしは、端午の節句にいただくという。
一緒に出てきた、ブクブクー茶には驚いた。泡をもったお茶で、上に落花生の粉が振りか



見たてることで…」
パン、パン。
主人の手が鳴る。
「おい、舞加那、ひとつ披露してくれ」
しばらくすると、きれいな衣装を身に付けて出てきた舞加那が庭園の池の前で琉球の舞踊を見せてくれた。
琉球の芸能はすでに首里城で何度か見たことあったが、女が踊るのは初めて見た。ただただ、素晴らしかった。琉球の洗練された踊りと音楽。そして、天女のように舞う舞加那に私は目を奪われていた。
しばらく呆然としていた私に、
「お気に召しましたか？」と主人が聞いてきた。
「あ、ああ。とても舞がうまくて見とれていました」
「本当は『加那』といいますか、この通り舞がうまいので、舞加那と呼ばれています。父親が亡くなり、家の事情で辻の遊郭に来たようです。まだ、見習いなのに芸事がうまく、でも10年に1人の逸材と評判で。しかも、器量もイイ。先日、大金を積んで女中として身請けしたんですわ。ほらウチ、商売をやりますから、客人が来るとこうして舞を披露させているんです」
「ああ、そうですか、彼女は貧しい家の娘でしたか」
平静を装ったが、琥珀を強く握りしめる自分がいた。
それは公人としての私ではない、心の底か

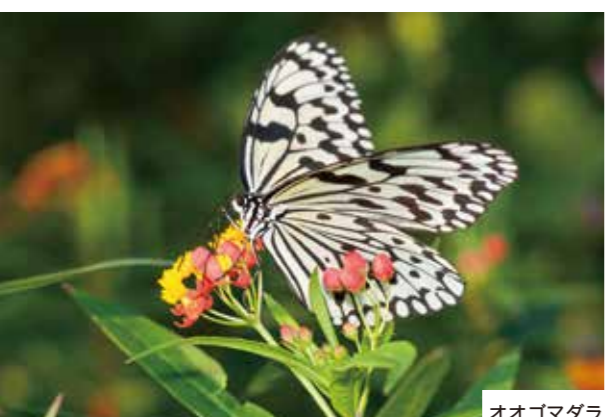
ら湧き出るようなひとりの人間の感情であつた。
踊りを終えた舞加那が、深々と頭を下げた。舞加那との間が、急に遠く感じた。国の違い、生き方の違い…なんとも表現できないが、相容れないにかだった。
私は、琥珀を懐にしまったまま、公人として乾いた拍手をしていた。
頭をあげた、舞加那はあの笑顔だった。
しかし、私は以前とは違う顔つきだったのだろう、舞加那の顔に一瞬不安が見えた。
私に近づいた舞加那は、丁寧にもう一度頭を下げた。
「本日はお越しいただきありがとうございます。私

は、お越しいただきありがとうございます。私を見透かしているようだった。
「ま、待つてください」
舞加那のうしろ姿に、声を絞り出した。
「と、とてもよかったです。これを持っていきなさい」
奥に下がろうとした舞加那を引き留めるように、琥珀を差し出した。
「これを。虫が入ってます。ムカデか何かかもしれませんが、私の国では龍が閉じ込められているといって人気のもんです」
主人が目を見ているのが分かった。龍の琥珀は、福州でもそう見られるものではない。彼の趣味からしても、のどから手が出そうな代物だろう。

ら庭自慢をしたらしい。舞加那はいるだろうか…。私は、文鎮代わりに使っていた琥珀を懐に入れた。舞加那に会えた時のお土産だ。
次良に導かれ、久米村の主人の家に向かう。ふと、大きな樹木に目をやると大きな蝶が舞っていた。ふわふわと踊るように優雅に飛ぶ。

次良が言うには、あの蝶はオオゴマダラとい、琉球、いや日本を入れても一番大きい蝶だという。大きくて目立つので鳥に狙われるのではないかと思つたが、体内に毒を持っている、鳥たちは近づかないぞうだ。
屋敷に到着すると、早速あずま屋で待ちわびた主人の庭自慢を聞かされた。
そこには舞加那の姿は見えない。出された琉球菓子のきっぱんがすすむ。
私は、手持無沙汰で、キョロキョロしながら舞加那へのお土産の琥珀をいじっていた。
「ところで御主人、この前、親切にしていたんだい…若い女性。確か…」
「舞加那ですか。そうだ、ちょうどここから見える庭を背景として、この辺りを舞台と

オオゴマダラ



オオゴマダラ



上天妃宮跡の石門

「よろしいのですか」

「ああ…」

「どうもありがとうございますー龍琥珀、大切にします」

受け取った舞加那は、笑っているのか泣いているのか分からない顔をしていた。

帰りは舞加那が送ってくれたが、宿に戻る途中、偶然蔡温に会った。蔡温は困ったような顔をしていた。

「成龍様、少しまずいことになるかもしれません。その時はお力を…」

蔡温は、舞加那をチラッと見てそのまま去った。その近くをオオ「マダラ」が優雅に舞っていた。

天使館にて

帰ると、徐葆光様から呼び出しがあった。急いで**天使館**に参せよという。

彼は、冊封使一行の中でも2番目の地位、冊封副使である。今回私を、技師として引き抜いてくれたのも彼だ。琉球国との交渉では、実質的な最高責任者である。

「成龍、こんな時にどこに行っていた」

いつもは冷静な徐葆光様が、苛立っていた。

「申し訳ありません。久米村の知人宅へ造園について少し」

「例の…か。いやなんでもない」

「如何しましたか？」

「琉球との交渉が、うまくいっていない。通例だと、我々が船で持ち込んだ品を琉球王府

その時の私には、怖いものはなかった。ただ彼女を守りたいという思いだけだった。

私は安宿を見つけ、舞加那にはしばらく身を隠すように伝えた。

私は精力的に働いた。舞加那のところへ行くこともあったが、仲間の華人たちにはれないように慎重にことを運んだ。琉球の窓口となつて交渉にあたっている蔡温さえも気づいていなかっただろう。舞加那は、匿われている場所で自分の田舎の料理を私に振舞ってくれた。質素だけど心のこもった、優しい料理だった。そういえば、1度だけ2人で外に出た。事情を知っている次良から借りた着物で、男に変装した舞加那と琉球人になりました。私で、那覇の大綱挽を見に行ったのだ。琉球の綱挽は夜に催されるため見破られることはなかったが、徐葆光様と王府高官とすれ違った時はさすがにドキドキした。厳しい交渉も、むしろ公人としてやりがいのある仕事となった。本当に充実した毎日だったが、不安がないわけではなかった。ひとつ一つの仕事が片付くというところ。それは帰国を意味していた。

孔子聖廟

私の仕事は、買取騒動の鎮静化だけではなく、首里王府との儀礼、接待。そして徐葆光様が王府と約束した、琉球人測量技師を育成指導するという仕事も新たに加わった。

が買い取るのだが、今回は全てを買い取る銀が用意できないと言ってきた。この役得を期待してついで来た船乗りもいる。不満を持った者が、あちこちで騒動を起こしているらしい」

蔡温が言う、『まずいこと』とはこれが…。

「持ち込んだ商品を船ごと燃やすという噂まで出ている。このままでは琉球との外交も、いや帰国もままならないかもしれん。琉球語が出来るお前に、騒動鎮静化の役を任ずる」

「かしこまりました」

「それから…」

徐葆光様は、出て行くこうとする私の背中に、ゆっくりと問いかけた。

「成龍、一時の情愛に溺れるなよ。お前には未来がある。そのために努力してきたのではないか。船が沈むのはゆっくりだが、気づくのが遅ければ一瞬で命取りだ。ましてや、今日から琉球人と交渉の仕事だ。弱みを見せるな。あの女とは別れろ！」

「…はじ」

私の行動が、徐葆光様に報告されている。どうやら、華人の中に誰か私の足元をすくおうとする者がいるようだ。私は蔡温の元に走った。

天妃宮

蔡温はすでに動いていた。珍しモノ好きのあの久米村主人にあたりをつけて、持ち込

昼は通常業務、夕方からは受講者を集めて**孔子聖廟**の中にある、**明倫堂**で教えていた。仕事に忙殺されていたため、舞加那とは2か月逢っていないかった。

「ですから、道具にはもちろん、測量する者同士に誤差があるとドンドンずれていきま

んだ品を売ろうとしていた。しかし、彼が欲しいのは龍の琥珀だという。商品の中にそれが含まれている事が買い取りの条件だと言ってきたぞうだ。

私は頭を抱えて蔡温の家を出た。あたりはすっかりうす暗くなっていた。

天妃宮の前に来ると人影があった。舞加那だった。

天妃は福州の航海安全の神様だが、信仰心の篤い琉球にもお宮があるのだ。琉球の人々は嵐の時、小さな船を繋ぎ流されないようにする。そんなことから縁結びのご利益もあるようだ。徐葆光様の顔が浮かび、私は物陰に隠れて様子をつかがった。舞加那は何か握りしめて祈っている。

それは龍の琥珀だった。

私があげた琥珀を握りしめ、祈りながら彼女は泣いていたのだ。

「舞加那！」

もうどうでもよかった。公人としての私が崩れる音がした。私は彼女を抱きしめた。舞加那も私の胸に顔を押しつけ、泣いている事を悟られない様にながら抱きついてきた。

「わあああ、ごめんなさい、ごめんなさい」

「どうした」

「あの男、ご主人様が、借金のかたに琥珀をよこせと。それであたし、これだけは渡さないうつて。だって、これは成龍様からいただいた…」

「お、落ち着いて舞加那」

す。そして…」

明倫堂の窓に人影があった。

「遅れてすみません」

引き戸が開き入ってきたのはなんと、男装した舞加那であった。一瞬驚いたが、幸いにして皆、話に熱中していて気付いていない。気付かれぬように平静を保とうとする私を見て、舞加那はつけひげから赤い舌を出している。

「よし、皆さん道具を持ってしばらく訓練しててください。遅れてきた君は、別に指導しますので、こちらへ来てください」

「おいおい、どういってもりだい」

「それは、遅いだったからでしょう？冊封使様！」

「シーシー、小さい声で！」

「では、今日こそは逢いに来ると約束してください。さもなぐは…」

息を大きく吸い込む舞加那の口をあわてて押さえた。

「分かったから。この後行くから！」

「では、波上宮でお待ちしております」

舞加那は踊るように、孔子廟から出て行った。講座を終え、私は足早に波上宮に向かった。

波之上の浜波の上でーチ

とつづく日が暮れていた。このくらいの時間になると、月以外見ているものはない。**波上**

「あ、あの男がとりあげようとしたので…叩いて飛び出してしまつて…」

「なんだ」

「え？」

「殺したのかと思いましたが」

「まさか！」

「ですすね。ハハハハ、舞加那、笑おう。こんな時は、笑おう」

「ハハ…」

舞加那は突然の私の催促に戸惑っているようだった。

「がははは、はい。舞加那笑って、加油（ジャーヨー）！」

波上宮



宮には日本を作った神様、イザナミが祀られているという。隣には仏教の**護国寺**が並ぶ。神仏習合の信仰文化は日本にもあったが、琉球の人々は、さらに天妃宮や天尊廟、先ほどの孔子などの我が国の神様も信じている。信仰の世界でもチャンプルー文化なのだ。

柏手（かしで）を打つと、境内に隠れていた舞加那が出てきた。今日は月も欠けていて、見えにくい。私は今夜、舞加那に求婚するつもりだった。帰国はせずに、琉球で測量の講師として生きる覚悟だった。そうすれば舞加那も安心してくれるだろう。

暗闇に、舞加那が震えているように見える…いや、違う。後ろから、顔を隠した男ともがら、6人出てきた。

「逃げて！」

舞加那の声が早いか一瞬の差で、そのうちの2人が襲い掛かってきた。私は、持っていた測量用の竿を使って応戦したが、後ろから石のようなもので殴られてしまい、徐々に意識が朦朧としてきた。

「悪く思っなよ、仲間に嫌われるお前が悪いのぞ」

何発殴られただろう。動けない私は海に投げ込まれた。水面の向こうから聞こえる舞加那の声がポコポコという私の息の音に消えた。

護国寺にて



護国寺



しているのですか？」

「今は会えない。でも大丈夫だから安心な
や？」

「お願いです。会わせてください」

「目が覚めれば、貴国の仲間が迎えに来る手
はずだ」

「嫌です、私は琉球で生きることを決めたの
です。舞加那はどこですか？」

「…会わない方がいい」

「どうしてですか、私の妻です…まだ了解
はもらっていませんが」

「彼女の体に龍が憑いたのじゃ」

またか。この連中は龍が暴れるだの、龍に
憑かれるだの…寺の僧侶までこの調子か！
「お願いします。彼女に伝えなければならぬ
のです」

ガラガラ…遠くで引き戸が開く音がした。
「蔡温です。成龍さん、意識が戻ってよかつ
た」

「蔡温…例の件、3か月も…申し訳ない」
目くはせをすると、気を使った護国寺の住職
は席をはずした。

蔡温に詫言を入れたが、どうやら例の騒動
は彼がどうにかまとめたらしい。そして
我々の船も、ひと月後に那覇を出港するこ
とだった。

「徐葆光様はお怒りでしょうね」

「いえ、徐葆光様は、あなたの琉球での仕事
を評価していました。あなたのお陰で琉球
に優秀な測量技術者が育っています。国王か
ら感謝とあなたの処分を穩便にといい

嘆願も出ています」

「琉球の…国王様か？」

「はい。琉球の女性とも別れたとのことで、
徐葆光様は今回の件は不問にし、このまま
帰国する」と

「わ、別れた？」

「はい。あなたの仲間が、舞加那を説得して
くれて」

「ちょっと待ってください、蔡温。仲間とは誰
ですか？私は舞加那と結婚するつもりで
す！」

蔡温の胸ぐらをつかんだが、彼は悪くない。
ともすると国際問題になりかねなかった騒
動の後だ。蔡温も、そして住職も、最後まで
誰が舞加那を説得したのか教えてくれな
かった。

さらに半月後、私はようやく歩けるようにな
り、護国寺から出るようになった。手当を
してくれた住職に礼をいい、わずかばかり
のお金を渡した。そしてもう一度、舞加那に
会わせてもらうように頭を下げたが、

「まだ、彼女の体の中には龍がある。龍が出
てくれば、いつか会えることもあるだろう。
この十分すぎる金は、彼女の生活費に充て
るので心配しないで帰国して欲しい」と
返すばかりであった。

いつか会える。わたしは住職のまつくな目
を信じようと思いい、寺を出た。

そのまま大使館に向かい、今回の一件を徐葆
光様に詫言、感謝した。

「成龍。もついい。お前も傷ついた。この国で

年を越してしまったな。これまでのことは
去年の事として忘れろ。2月16日にここを
発つ。いいか、帰国したら二官吏としてやり
なおせ」

船出までの私は、まるで抜け殻のようだった。
波の上の海で舞加那を1日中待っていた
こともある。柏手もむなしくなるだけで、彼
女は現れない。

「舞加那 逢いたい。龍に憑りつかれていて
もいい。あなたに逢いたい」杖をついて探し
た。天妃宮にも孔子廟にも、綱挽の場所や、
ハーリーの海にも舞加那の姿はどこにもな
かった。

三重グスク

嘉慶6年2月16日 ― 順風

我々の船は錨をあげ、ゆつくりと進みだし
た。船が岸から離れると、三重グスクが見え
てきた。三重グスクには見送る琉球の人た
ちがいて、我々の船に手を振っていた。

「成龍様、お氣をつけて…」

一瞬、舞加那の小さな声が聞こえたような気
がした。

「ごちです、ごちです、おーい」
蔡温の声がする方向を探した。

「舞加那！」

三重グスクの端に、護国寺の住職と蔡温に
連れられた、お腹が大きくなった舞加那の姿
があった。

「舞加那、舞加那！」

彼女は、琥珀を持った手を大きく振り、時折
りつなずくようにしていた。
私は、ためらいもなく大声で泣いていた。嗚
咽で言葉にならなかったが、彼女の名を叫び
続けた。

小さくなる三重グスクの群衆の中に、身重
の彼女は消えた。船中で私はすぐに手紙を
書いた。舞加那、そしておそろく会つことの
できない我が子を思い浮かべながら…。

舞加那

こんな形で帰国してしまった私を許してくだ
さい。私たちの子は産まれましたか。あなたは
元気ですか。その子は、男の子のような気がし
ます。彼の名前に、私の文字「龍」を付けてく
ださい。私の贈った龍の琥珀を売れば、しばら
く凌げるでしょう。子どもに十分な教育を受
けさせてください。私に似ていれば手に職を
持つようになるでしょう。土木、石工…：福州
に着いたら書物を送ります。琉球国の役に立
てる人間に育つてくれることを夢見ています。
できれば彼に、港に龍を創るよう言ってくだ
さい。私と子ども、2頭の龍が、あなたと琉球
を永遠に守ります。そして、いつか私も生まれ
変わって龍の港を訪ね、あなたや子どもに逢
いたいと思います。ずっと愛しています。

(おわり)

ストーリー制作・監修 曾根仁然

この物語は史実に基づいた内容を元にしたフィクションです。
※1 現代では黄色（久米、黒、泊、緑）那覇（とう）呼び方が般
的。尚、琉球王朝時代は緑をオール（書）と呼んでいた。



龍柱

